広報 九州

平成27年3月10日
（２０１５年）
No １７１８

九州森林管理局
〒860-0081
熊本市西区京町本丁２－７
IP電話 050-3160-6600(代表)
http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/

国民の森林・国有林

平成26年度 第2回 屋久島世界遺産地域科学委員会&ヤクシカWGを開催

２０１５年２月25日～26日、屋久島世界遺産地域科学委員会が鹿児島市の鹿児島県庁において開かれました。

当委員会は、世界遺産に登録された屋久島世界遺産地域を管理する行政機関が管理に必要な科学的知見に基づく助言を得る為に学識経験者などから構成され、２００９年度に設置されたものです。

今回の委員会では、第１回科学委員会における主な議論を整理した上で、①モニタリング調査の実施状況②ヤクシカ対策③山岳部の利用の検討状況について論議がなされました。

今回の委員会へ出席された各委員のみなさん

26日に開かれた科学委員会では、前日のヤクシカWGと特定鳥獣保護管理検討会の合同会議の報告が行われ、ヤクシカの生息数の調査方法について助言がありました。また、ヤクシカ対策については、将来的には「屋久島地域ヤクシカ管理計画（仮称）」に統一されることとなり、併せて順応的管理の指標となる「生態系管理目標（素案）の設定」について、提案があり来年度の策定に向けた論議がなされました。

山岳部における利用検討の中で、「縄文杉周辺の再整備」については、再整備に伴うテーマ設定、縄文杉デッキの撤去に伴う代替デッキの設置、南側デッキやケーブリングの撤去などについて、委員会の助言をいただきつつ地域関係者と調整しながら対応することとしています。

また、「山岳部の利用のあり方の検討」では、民間団体、一般島民及び当委員などの有識者を構成員とする検討会を立ち上げることとし、その検討体制、検討内容、スケジュールなどの提案があり、来年度以降、決定することにしています。

冒頭あいさつをする荒木屋久島町長

その他として、屋久島町から３件の話題提供があり①屋久島ガイド登録認定制度の検討状況②ユネスコエコパークの拡張登録申請状況③屋久島町入島税等検討会議の検討概要について、現状報告が行われました。

今後も当委員会の助言を得ながら屋久島世界遺産地域の貴重な自然環境を将来にわたり適正に保全・管理していくこととしています。

（担当＝計画課（自然遺産保全調整官））

ヤクシカ対策について説明をする迫口保全課長

冒頭あいさつをする中山計画保全部長

自署の名山

北薩森林管理署
地域技術官
川畑　勇二

伊佐市民の憩いの場
「高熊山」412㍍「鳥神岡」404㍍

当署管内の伊佐市に位置する高熊山（たかくまやま）標高412㍍と鳥神岡（とがめおか）〈鳥神山〉標高404㍍は、伊佐市内を流れる羽月川を挟んで東西に約4㌔㍍離れて位置しています。

高熊山は10円ハゲのように、丸く山頂が、はげているのが特徴で、1877年（明治10年）6月、政府軍が大口方面に侵攻した際に西郷軍と激しい戦闘が行われた激戦地で、現在でも当時の塹壕の跡や弾痕を受けた岩などが残り、激しい地上戦の様子を生々しく現在に伝えています。麓には政府軍が侵攻した際、西郷軍の熊本隊が高熊山に陣地を築き、激しい戦闘を繰り広げ、その際、熊本隊は多くの戦死者を出したことから戦死者を埋葬した墓地がつくられ、現在も供養が行われています。

高熊山山頂より伊佐市内を望む

西南の役塹壕の跡

鳥神岡は別名「伊佐富士」と呼ばれ大口平出水地区のシンボル的存在となっており、地元ではこの鳥神岡をモチーフにした「とがめん」と言うキャラクターも誕生しています。

この二つの山には、まず、高熊山の九合目にある大石について、昔高熊山の神と鳥神岡の神がどっちが強いかと力くらべをすることになり、ともに大きな岩を担いで頂上を目指したところ、鳥神岡の神が一気に駆け登り、その時高熊の神はまだ九合目までしか登れず負けたと知った高熊の神は怒ってそこに岩を投げ捨てたとか、高熊山と鳥神岡が背比べしたが天狗の判定で鳥神岡がわずかに低いと決まり、負けん気の強い鳥神岡の神が密かに大きな岩を担いで頂上に据えたといった言い伝えがあります。

両山とも頂上からは伊佐市内を一望でき、特に高熊山は山頂まで車で行くことができ頂上が高熊山公園として整備されていることから、地元の小中学校では遠足で利用するとともに、市民の憩いの場となっています。

西南の役弾痕の跡

日南市林野火災防ぎょ訓練へ参加

【宮崎南部森林理署】2015年宮崎県林野火災予防運動行事の一環として、「日南市林野火災防ぎょ訓練」が日南市酒谷地区の民有林で行われました。当日は、日南市消防本部、地元消防団、関係機関など約100人が参加。消防ポンプ車による放水や防災緊急ヘリによる空中からの消火訓練。また、林野火災訓練として、鎌やチェンソーによる防火線設定訓練やジェットシューターによる残火処理訓練が行われました。当署からは職員7人が参加し、重量20㌔のジェットシューターを背負い、万が一の林野火災に備え本番さながらに訓練を行いました。

残火処理訓練へ向かう署員ら＝宮崎南部

平成26年度 第2回 照葉樹林復元ボランティア間伐・森林散策を実施

2月21日に宮崎県綾町中尾国有林において、2014年度第2回照葉樹林復元ボランティア間伐及び森林散策が、綾の照葉樹林プロジェクト連携会議主催（九州森林管理局、宮崎県、綾町、日本自然保護協会、てるはの森の会）で開かれ、信州大学地域戦略センター（韓国からの留学）1人、宮崎大学5人、南九州大学2人、立命館アジア太平洋大学（別府市）1人の学生と大学関係者及びてるはの森の会会員9人、綾町民、水源の森関係者を含めた23人が参加。

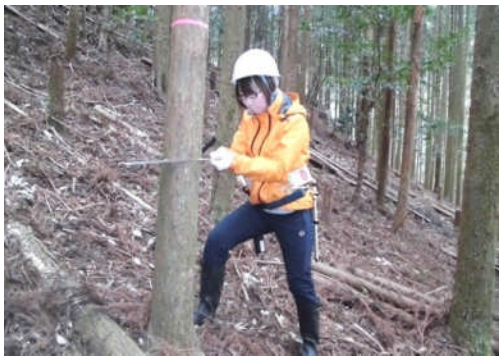
綾町・川中キャンプ場において、開会式があり主催者を代表して﨑野健輔宮崎森林管理署長より「本日は、多くのみなさんに参加いただきました。綾プロの目的の一つである復元事業としての間伐作業などを体験しながら、参加者間の交流も深めていただきたい」とのあいさつの後、松永善人九州森林管理局計画課森林施業調整官から綾プロの事業内容などの説明がありました。

その後、準備体操、班編成を行い作業地に移動し、宮崎森林管理署職員による間伐の実演を兼ねた安全指導を受け、間伐班と森林散策班（河野耕三氏ガイド）に分かれ、森林管理局・署職員の指導の下、参加者同士友好を深めながら楽しく作業を行いました。

署員から間伐の指導を受ける参加者

参加した大学関係者・学生は、森林・林業コースを学んでいるが間伐・玉切り作業は初めての人が多く、「自分の力で初めて木を倒した」貴重な経験や「綾プロでは、韓国や長野県にない取組をしている。今後も注目していきたい」、また森林の散策では、「照葉樹林を含めた動植物の生態やトロッコ道跡、炭焼き跡など山に生きた先人の歴史について、貴重な話が聞けて良かった」などの声が聞かれました。

（担当＝計画課）



自分の力で始めて伐倒作業をする間伐班

白砂青松「さつき松原」再生を

ちょっと一言

「さつき松原」は、福岡都市圏宗像市の北方に位置し、東西5・5キロメートル、面積140ヘクタール、クロマツ20万本が群生する海岸保安林として、全国白砂青松100選に選ばれています。

防風、防潮、防砂など防災機能に加え、休養景観保全と地域の人々の生活を守り、自然環境のすばらしさを与え続けてきました。

さつき松原管理運営協議会
会　長
桑野　通孝さん

しかし、地球温暖化による海岸の汀線の移動で里浜の消滅、一方で松原は「マツノザイセンチュウ病」による甚大な松枯れや、松葉・松枝を燃料にしていた生活からの転換により、人と松原の関わりは失われ松原は荒廃してきました。かつての美しい松原に再生したいという地域の要望を続けた結果、「レクリエーションの森」に設定されていたこともあり、国直営事業として歩道や木製ガードレール、東屋、丸太防風柵の設置とともに森林保全事業が行われました。

これを機に、2006年度に「さつき松原管理運営協議会」を設立し、松原の整備、管理および活用を円滑に進めるため福岡森林管理署と協定書を締結し、国有林、宗像市、地域住民などの協力の下、松原の再生に向けて松葉かきや抵抗性マツの植樹、松枝拾いにゴミ拾いなどに取り組んでいるところです。

また、松原の里親制度として企業などへの働きかけを行い、その協力の下アダプト制度での取り組みも併せて行っています。

こうした取り組みにより松原の再生が進んでおり、国や市、地域住民、企業など関係の皆さんの協力の下での日頃の地道な努力の賜と感謝申し上げます。

これからも松原の有する環境・観光・健康資源価値を、さらに高める活動を続けていきたいと考えていますので、一層のご支援をお願いします。

林業機械化センターによるチェーンソー研修
森林官を主体に19人が参加

2月17日から19日までの3日間、森林技術・支援センターおよび宮崎森林管理署管内の去川国有林内において、林業機械化センターによるチェーンソー研修が行われました。今回の研修は森林官を主体に19人が参加。研修の初日は森林技術支援センター会議室において、「伐木造材作業に関する法令」「伐木作業に関する知識」「健康障害を防止するための目立て」として、チェーンソーに関する基礎知識と振動障害および予防に関する知識を受講後、2～3人の班を編成しチェーンソーの目立ての実技を行いました。研修2日目は現地において、前日に自分達で目立てを行ったチェーンソーと指導官が目立てしたチェーンソーで交互に材を切断。切れ味や振動の違い防護衣ズボンの防刃性を実際に体験しました。午後からはチルホールを使ったかかり木の処理方法と倒したかかり木を使用しての枝払いと造材作業と模擬木を使った伐倒時の受口と追口作りの実習を行い、3日目は「チェーンソーの構造とメンテナンス」として内部構造や構成部品の機能、防振装置などについて分解組立の実習を通じて学びました。3日間の研修でしたがチェーンソーについて深く学ぶことができ、今後、各事業の現場における指導に役立つものと思います。

（担当＝総務課）

目立てしたチェンソーの切れ味を体験

チェーンソー目立ての実技

モニターの声

森林に思いを寄せて

小川　和正さん

昨年の2月頃、何かボランティアに関する記事はないかと目を皿のようにして、地方紙を読んでいたところ、森林モニター募集の記事を目にし、応募したところ採用され、一年が経過しようとしています。

モニターとは何をするのかの知識も無く、情報を得て、日本の森林に関する勉強をさせてもらっている中で、一つだけ気になっていることがあります。それは、県内各地の山から届くシカによる森林被害の話です。大分県では、祖母・傾・国東の山々・英彦山から耶馬溪・由布鶴見、ここ数年はくじゅう山系からも被害の話が聞こえてくるようになりました。

40～50年前は国東などにいるとは聞いていましたが、実際に山でシカに出会ったり、鳴き声を聞いたりすることはまずありませんでした。

祖母・傾ではスズタケが消え、鶴見岳ではミヤマキリシマが減少していると聞いています。

隣の宮崎県では、シカの採餌被害によって絶滅危惧種が一気に増えたという話が伝わっています。大分県下の山々でも同様のことが起こっているのではないかと心配しています。

なぜこんなにシカが急に増えたのでしょうか？理由は山から人が減ったとか、猟師の高齢化などと言われていますが、私たちと山の関わりが変わってきているのではないでしょうか？

「山の恩恵」と言われても、何か具体的に思いつきますか？木材は外材に押されていますし、木地師という名前はもう聞きません。薪や炭は使わないし、鹿肉を食べることも普段はありません。

一般のかたがたにとって登山が、唯一の接点だったりしていないでしょうか。

しかし、よく考えてみると私たちの生活にとって大切な「水」や「空気」を提供してくれているのですが、認識しにくいものです。

山や森は、存在自体が変わるものがないほど大切なものです。一人でも多くの人が山に入り、親しみ、学び、それらを生かしていく事がこの地球を守る観点からも、優先して取り組まなければならない事項だと、モニターを体験して強く感じました。

そして、数年前耶馬溪から日田に至る大分県北部で起きた洪水で大被害を受けた報告書があります。確かに予測出来ないほど集中的な豪雨であった事は確かですが、シカ被害によって森林の治水力が低下しているのではないかという指摘があります。これは、シカの増大を招いた人災に他ならないということになります。

私たちは、「山」そしてそこで暮らすシカ達とどう付き合っていったら良いのでしょうか？

そんな事を考えながら今日も近場の山を散策しています。

綾プロ第21回連携会議及び事業説明
～10周年記念に向けた取り組みを確認～

2月10日に宮崎県綾町役場会議室において、綾川流域照葉樹林帯保護・復元計画（綾プロ）第21回連携会議が、関係機関5者（九州森林管理局、宮崎県、綾町、日本自然保護協会、てるはの森の会）などの出席のもと、開かれました。

会議は、2014年度事業取り組み状況（進捗状況）、10周年記念行事の実施、綾プロ事業説明の実施、綾プロ管理計画の策定、綾プロの運営などについて報告および提案がなされ、事務局提案どおり了承されました。

特に、2015年度は綾プロが10周年を迎えることから記念行事を含めて、協定5者が一丸となり取り組むことが確認されました。

また、これまで同日に開いていた綾プロ事業説明会は、新たに2月15日の綾町公民館大会の場で行うこととされ、協定5者の代表として崎野健輔宮崎森林管理署長が説明を行いました。

当日は、綾町公民館ホールに綾町民約600人が参加する中、崎野署長より「綾プロの取り組みと成果、協定5者による協働の取組」について説明がなされるとともに、2015年度は綾プロが10周年を迎えることから記念行事への支援・参加をお願いしました。

（担当＝計画課）

綾町役場で開かれた連携会議

民国連携協議会を開催

【都城支署】「准フォレスター等活動促進連絡協議会」が設立されたことから従来の構成員に、新たに森林整備推進協定者や支署関係職員・森林官を加え総勢50人が参加し「北諸県・西諸県地域民国連携協議会」が開かれました。午前中は、実行中の主伐・再造林の施業方法や機械によるコンテナ苗の植栽方法を視察後意見交換を行いました。午後から支署会議室において局技術普及課甲斐博文企画官から「民国連携について」宮崎県北諸県農林振興局・同西諸県農林振興局の担当者より各市町の「森林経営計画の認定状況および課題について」の報告。また、各事業担当者からは、事業実行者としての現状報告があり、活発な情報・意見交換となりました。当地域の森林・林業・木材産業発展のためには、各地域を管轄する森林官を含め支署職員と林業行政担当者間の連携および情報共有と施業区域の集約化などが重要であることを再認識し、今後ともさらに連携強化していくことを再確認できました。

再造林の施業方法等を視察＝都城

人のうごき

3月1日付森林管理局長発令

宮崎北部署地域技術官
渡邊　明（宮崎北部署）

◇退　職◇
長い間ご苦労さまでした

◇定員内職員◇

2月28日付森林管理局長発令

中村重和（総務課）

（担当＝総務課）

日本林業の追い風に

先日、一冊の本を手にした。それは、「森林経営をめぐる組織イノベーション」－諸外国の動きと日本－。

世界における日本の立ち位置、日本の森林林業に係る経営の現状、これからの森林林業の取り組むべき課題、真に必要な組織形態などが論ぜられていると直感した。

そもそもイノベーションとは新たな価値を生み出し、従来のあり方を変化させていくなどの意味がある。

主伐・再造林を着実かつ円滑に実現していかなければならない今日の林業において、林業の価値を生むために経営・制度・組織などを変えるものであり、正に将来の日本林業を論じるデータと示唆などの玉手箱に違いない、読むなら今だ、と再び直感した。

読み終えた。内容は深い。直感はあくまでも直感だ、そう思わざるを得なかった。深かった。

とても全てを語れる訳もないが、8カ国の組織・制度など事例を分析し、日本の民有林政策が官製イノベーションの主導性と組織による自生的秩序形成の脆弱性について触れられている。

これらを克服するために人工林経営システムを3区分して評価会計を確立、人材の任務の差別化、補助金依存の是正などが分析されており、興味深いものであった。秋の夜長でもないが手にとってみると将来が垣間見れるかもしれない。

（技術普及課長　濱田秀一郎）

平成26年度国有林間伐推進コンクール表彰式
～林野庁長官賞を始め4社が受賞～

２０１４年度国有林間伐推進コンクールの表彰式を2月27日九州森林管理局で行いました。

間伐推進コンクールは国有林野事業における間伐などの発注事業や、立木販売において、優れた品質の森林整備を行うとともに、高い生産性を達成した取り組みを競い、その作業システムの特徴などを公表することにより効率的かつ低コストな森林整備について普及、推進に資することを目的としています。

今年度は熊本県湯前町の上球磨共同事業体が行った事業が、全国で初めて車両系誘導伐等部門において林野庁長官賞（優秀賞）を受賞されました。

受賞のポイントは、○森林作業道沿いに帯状の伐区を設定したことによる木寄せ生産性を向上／○集造材時にロングリーチグラップルなどを利用して枝条整理を行い、地拵えを省力化／○獣害防止ネットを寝かせ張りとし、支柱として伐根などを利用することにより設置効率が向上し、資材費を縮減したことなどを高く評価しての受賞となりました。

また、九州森林管理局長賞（優秀賞）としては大分県大分市の有限会社医大ヶ丘緑樹園、鹿児島県出水市の株式会社永田林業、宮崎県日南市の日北木材有限会社が受賞しました。

九州局では今後においても、多くの事業体からコンクールへの参加を募り、先進的な取組みについて、公表し普及、推進に資することとしています。

（担当＝資源活用課）

表彰された関係者のみなさん

イリオモテヤマネコを世界へ発信
～水あふるる森のヤマネコ公開シンポ～

【沖縄森林管理署】2月15日、沖縄森林管理署は、西表森林生態系保全センター、琉球大学、竹富町と共催で、国の特別天然記念物イリオモテヤマネコと、その生息地である竹富町西表島の自然環境の保全について考える公開シンポジウム「イリムティヌ　ヤママヤー～水あふるる森のヤマネコ～」を同町西表島の中野わいわいホールで開きました。

シンポジウムでは、はじめに当署迫本翔太技官から、西表島森林生態系保護地域の設定・拡充、課題だった内陸部の調査など、イリオモテヤマネコの保護に向けた国有林の取り組みについて紹介。続いて4人の専門家に、西表島の森林と生態系について関心を深めて頂くため講演があり、琉球大学教授傳田哲朗氏からは、亜熱帯に属する西表島の植物多様性、外来種植物の浸食の恐れなどについて話がありました。また、東海大学研究員水谷晃氏からは、仲ノ神島と西表島周辺の水鳥の状況、西表島周辺での営巣数の減少など、地域を挙げた継続的な見守りの必要性について話しがありました。

最後に、琉球大学教授伊澤雅子氏と同大学研究員中西希氏より、これまでの調査研究から明らかになったイリオモテヤマネコの生態や分布状況、将来のために取り組むべき課題についての話しがありました。

今回のシンポジウムを通じてイリオモテヤマネコの生息地である西表島を情報の発信源に、沖縄本島、全国、更には世界へとイリオモテヤマネコとその希少性についての認知が広がり、理解や関心が深まる事を願っています。

イリオモテヤマネコは、世界中で西表島にしか生息していない、最も希少なネコ科といわれています。当署では、島の全面積の85%を占める約24千ヘクタールの国有林の管理経営を行っており、その内85%に相当する約20千ヘクタールを西表森林生態系保護地域に設定し、より厳正に管理しています。

この厳正な保全管理を通じてイリオモテヤマネコなど国有林内に生息する希少な動植物の生息地の保護に取り組み、琉球大学をはじめ多くの方々のご協力を得ながら、１９９３年よりイリオモテヤマネコなどの保護のために巡視や調査にも取り組んでいます。

開催されたシンポジウムの様子＝沖縄

会場に展示された写真等＝沖縄

第２回学校の森・子どもサミット実行委員会は、２０１５年８月３日～５日に岡山県内で開催する「第２回学校の森・子どもサミット」に参加し、学校での森林環境学習の発表を行う小学校と、本サミットの趣旨にご賛同いただける協賛企業・団体を募集します。

１．開催日時及び場所

日時：２０１５年８月３日（月）午後～８月５日（水）午前

〈８月３日〉会場：岡山大学Junko Fukutake Holl（岡山県岡山市）**〈８月４日、５日〉**岡山県西栗倉村内

２．主な内容〈８月３日〉

・児童による森林や緑を活用した体験活動などの発表
・有識者によるパネルディスカッションなど（小学生は、小学生向けワークショップ）

〈８月４日〉
・西栗倉村の森林や人を活かした教育「ふるさと学習」の体験
・森林環境教育を広げていくための情報交換会

〈８月５日〉・閉会式

３．募集内容

（１）募集校数　　全国から10校程度

（２）募集資格

①「学校林」や「遊々の森」など、身近な森林において森林環境教育に取り組んでいる小学校

②校庭の樹木や身近な公園・緑地等を利用した森林に関連する環境教育や、林間学校等の機会において森林内での活動に取り組んでいる小学校

③上記①及び②に該当しないが、木材、木の実、キノコなど森林由来の資源やその他森林環境教育の教材などを利用した活動を行うなど、森林に関連する環境教育に取り組んでいる小学校

④現在は、上記①②③のいずれにも該当しないが、学校間交流や環境教育などの経験から、今後、こういった活動に取り組みたいと考えている小学校

（３）申込締切　２０１５年４月15日（水）必着

４．協賛企業・団体の募集

①サミットの趣旨にご賛同いただける企業・団体を募集します。　協賛金：一口５万円　※20口以上は「特別協賛」

②協賛特典

（１）本イベントのポスター、各種広報媒体への企業名の表示　※特別協賛社はロゴも表示

（２）本イベントでの企業紹介や、企業名・ロゴの掲示

（３）本イベント終了後の報告書への企業名・ロゴの表示　※２口以上で１頁、特別協賛社は見開きページの企業広告掲載

５．お申込み、お問合せ先　※詳しい内容につきましては下記のところまでお問合せ下さい。

【第２回学校の森・子どもサミット実行委員会事務局】　〒１５６－００５１　東京都世田谷区宮坂３－１０－９
経堂フコク生命ビル３階　TEL：０３－６４３２－６５８０　E-mail：mail@gakkou-no-mori.org
FAX：０３－６４３２－６５９０　Homepage：http://www.gakkou-no-mori.org

オリジナル木工作品を作製

【西都児湯森林管理署】2月3日、西都市立銀上（しろかみ）小学校児童10人を対象に「木と子どものふれあい教室」と題して木工教室を開きました。

最初に当署職員らによる「森の子供クイズ」を楽しんだ後、自分で描いた設計図を基に、当署職員らによるアドバイスやサポートを受け、椅子や本立などの木工品制作に取り組みました。ノコギリで板を切ったり、金槌で釘を打ったり、ぎこちない手つきで四苦八苦しながらも、設計図とにらめっこしながら、自分だけのオリジナル作品を作りあげました。最後に、児童代表から「木材で椅子や本立を作れてとても楽しかったです」とのお礼の言葉があり、子供らは、木材の肌触り、温もり、心地よさを体感できた記憶に残る木工教室になりました。この木工教室は、子供の頃から、森林・林業・林産業のことを知ってもらい、木や木材に親しむ心を育むきっかけにしてもらおうと、当署、西都市みどり推進会議の共催で、西都市森林・林業・林産業活性化促進地方議員連盟、西都市木青会の後援により開いたものです。

完成した作品を前にする参加者＝西都児湯

第60回愛林駅伝競走大会を開催

【熊本森林管理署】2月14日、熊本県山都町において、「青少年に自然愛護の心を育て、緑豊かなふるさとつくりへの意識高揚をはかる」をスローガンに、第60回愛林駅伝競走大会が開かれました。山都町内と近隣3町の中学校から12チームが参加し、5区間14・3キロメートルで健脚を競いました。昨年の第59回大会は大雪のため中止となりましたが今大会は晴天に恵まれ、町民の温かい声援の中、昨年の鬱憤を晴らす快走をみせ、第58回大会の記録を上回る好記録となり、大いに盛り上がった大会となりました。

第60回愛林駅伝のスタート＝熊本

都会の中の憩いの森

監物台樹木園の多様な植物

⑧⑨ ソテツ（ヤシ科）

役所や記念館の玄関の庭園にシンボルとして植えられ、現在でも高齢級のソテツを見ることができます。ソテツの名前は、ソテツが衰弱したときに根元に鉄くずをまいたり金釘を幹に打ち込むと元気になることからついた名前です。

葉は羽状に伸びていますが、葉先は尖り触ると痛いです。さて、葉は奇数羽状複葉または偶数羽状複葉でしょうか。調べてみましたが、琉球植物誌をはじめ他の図鑑でも「羽状複葉」と記載されています。奇数、偶数にこだわる必要はないようです。

果実の大きさは卵形やや扁平、大きさはクルミくらいの朱赤色で光沢があり、歌に詠われている「赤いソテツの実」です。

茎や種子は食べられると解説があり、種子のデンプンは猛毒を含んでいますが、水にさらすことによって食べられるそうです。「さらす」技術を知らない素人は食べない方が無難でしょう。

沖縄では、1975年に牛のソテツ中毒が初めて確認され、以後1982年までに116頭の牛が中毒になり、そのうち29頭が死亡したと報告されています。

みどりの散歩路

通勤途中の梅の花が満開となり、寒さも緩み春の気配が感じられる時期になった▼熊本県の阿蘇地方や福岡県の平尾台では、野焼きが行われるなど、春に向けての準備が着々と進んでいる▼進んでいるといえば、この時期クシャミ、鼻水、目の痒みなどに悩まされている人が多い「花粉症」の治療法。なんとコメを食べ続けるだけで花粉症が治る時代がくるかもしれないとのことである▼開発したのは農業生物資源研究所というところで、遺伝子組み換え技術を駆使して「スギ花粉症治療米」を開発したとのこと▼今後、東京慈恵会医科大学で臨床研究を行い安全性を確認し、製薬会社などと組んで治療効果を調べる臨床試験に移る事になるそうだ▼この研究によりコメの需要が増えれば、農業の活性化にもつながると期待されている▼一方、木材業界でも新しい技術の開発は進んでいる▼鹿児島大学が開発した新型集成材「SAMURAI」などは新聞でも取り上げられていた。今後も新しい技術開発により木材産業も活性化することを期待したい。（也）